私にとっての看護師像が形成される

老年看護学実習で受け持ったのは認知症をもつ 90 代の女性であった。「おらは、稲植えんのが早かったぞ〜」と、農村で過ごされた少女時代を何度も話されて、検温で肌に毎朝触れる度「お仕事される人の手はつめてえよなあ、おらのはあったかいっぺ？」と私の手をさすってくれる明るく優しい方だった。

実習最終日は塗り絵をした。A さんは加齢の影響で視界が霞むので、一緒に色を選んで私が塗った。できたぬり絵に私の名前を書いてプレゼントすると「きれぇな色で、よくぬれたなあ」と両手に持って目を細めていた。ぬり絵を病室に貼りたいと言うので、テープを持って車椅子を押して病院へ行く。貼ったぬり絵を車椅子から眺めて「こうしてたら忘れねえよう」と呟かれる。胸が締め付けられた。「後でまた来ます」と言ったら「待ってるよ、待ってるよ」と A さんは繰り返された。待っていることさえ忘れてしまうとしても、その時のこの瞬間の今の気持ちは紛れもない本物なのだ。

自分の認知機能、特に銘記能力が低下されているのは、理解されている。話すのはエピソード記憶ばかりであり、私は頭のどこかで A さんの記憶に私が残らないと思っていた。

それでも、より A さんの近く、近くに行こうとすべきだ。終わりない看護。知ろうとする、寄り添うことを辞めてはいけない。A さんは、年齢的にあと 10 年過ごせるだろうか、この 10 年をどう過ごすのが幸せだろうか、おやつのケーキを食べる姿を遠目に見ながら考える。しばらくして A さんが私に気づかれた。駆け寄って、目線を合わせて「ケーキどうですか？」と伺うと「美味しい、最高」と笑ってくださった。この歳になっても最高を更新できるのは素敵だ。その目であなたは何を見てきたのですが？その小さな小さな身体で何を背負ってきたのですか？その皺はどんな喜びや悲しみが刻ませたのですか？知りたいことはまだ沢山あった。

実習時間も終わり、挨拶をする。きっと夕飯を摂る頃には、明日の朝には私を忘れてしまう。それなら別れも辛くないと思っていた。それでも涙が溢れてしまう。いつも手を握って話していた。その手の力がこの日はぎゅっと強くなり、片手の甲で「そんな顔して」と頬を拭われる。「この顔忘れねえよう、いっぱい泣いて可愛い顔して忘れられねえよう」と話すので「忘れないで」と小さな身体にお願いしてしまった。忘れても思い出してください。思い出せなくてもぬり絵を見てください。私の胸のなかにいてください。私は忘れない。

その後の実習でも多くの患者さんとの出会いと別れがあった。現在、私は A さんやそのほかの患者さんの幸せを考える一員で少しでもあれたことを嬉しく思っている。寄り添うということに色がついた。看護師は支えるだけでなく、人との出会いに支えられている。この気づきを持って看護師になることが、今までの実習で受け持ち、「頑張れ」と言ってくださった患者さんへの応えになると私は考える。